
卷

頭

言

教養部長

高松 法子

学校の授業と学習の関係は、脱学校的学習か、あるいはテラー・システム学習かという複合的状况をまねき、はたまた児童を生徒にする学校という虚構において教授されればされるほど学校が実在感を増すと、いう風なことをあるドイツの教育学者が述べているのを、どこかで読んだ記憶がある。これは、単なる比較のレトリックとしてではなく、今日の教育がおかれているある種の状況を物語っているのかも知れず、また外へ目を転ずれば、いわゆる日本かこみが進行し、ただでさえ国内の緊張が高まりつつある。

さて本題に入ることにしよう。教養課程教授会のスタッフは、本年から四十名をこえ、四学部の教養部門を主として担当することになった。教養部としては、大学における教養教育の視点、方針等について、考えているところを披歴し、意見や批判を求めながら、いつそう有効で、よりよい教育を推進する必要がある。従って、論稿、研究ノート、程の性質上、専門分野も多岐にわたり、研究紀要だけでは収録できない分野もある。従って、論稿、研究ノート、書評、翻訳だけでなく、調査報告、文学、文芸、文芸批評、海外報告、学会、研究動向なども、幅広くかつ積極的に掲載しうる雑誌を発行する必要に迫られた。

さらに、教養部教員の地域社会への貢献度を示す、社会的活動、文化的活動も、地域に生きる大学として当然の義務であり、こうした分野での活動報告なども掲載することとした。また、これまでなぜか等閑に付されてきた教育研究について教員の考え方を発表し、一層充実した教育活動ができることが望ましい。これらの多様な研究集録は、従来の紀要に比べ、質的な相違ではなく、種類の多様性、より広いジャンルを含むものと思われる。

この『リベラル・アーツ』発刊の意図の一端を述べれば以上になるが、これらの収録項目の多様性よりも、より重要なのは、ひとつの教育組織の中にいる教養部教員がこれらの発表を通していかに合意を形成しうるかという問題がある。

さきに大学をとりかこむ社会的緊張について述べたが、そこから生ずる学生の学問に対する態度、入学動機についての意識変化が明確になってきている。これらの教育上の問題点を整理し、有効な対応策を構ずるには、従来のように、われわれ教員が個別に試行錯誤を繰り返すだけではなく、それぞれの専門領域がかかえる研究・教育上の問題点を相互に理解し、教育方法に生かす道を考える時期にきているように思われる。したがって本誌の刊行にあたって望まれることは、研究と教育について古くから求められている自由な場の確保と、学生の要望や、かれらの置かれている社会的立場への理解、そこから生ずる種々の研究と教育上の問題解決について考えるための時間的余裕の保証、また考え、議論する経過、ないし結果の発表の場として、本誌が役立ち、教養部教員の中に、ひとつの力になりうるような合意の生まれることを願うものである。